

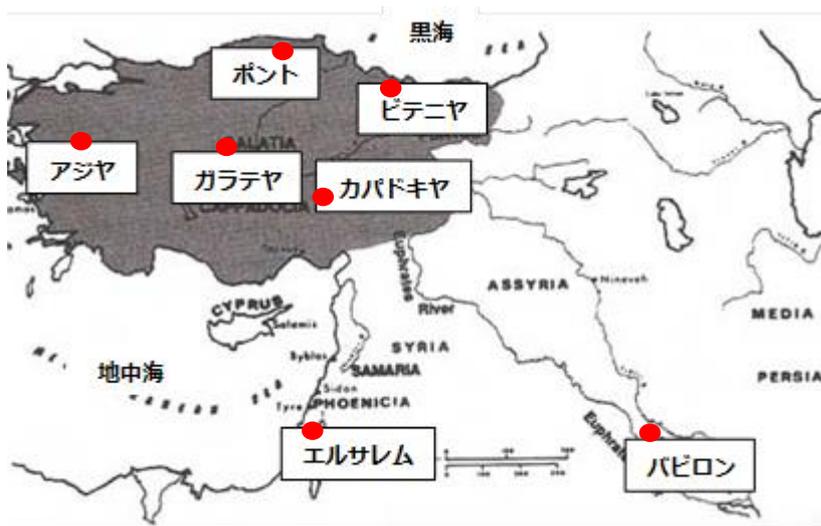
## 「パラレリズムとヘブル的考察」

I ペテロ 1:1~25

### はじめに

1:1 イエス・キリストの使徒ペテロから、ポント、ガラテヤ、カパドキヤ、アジア、ビテニヤに散って寄留している、選ばれた人々、すなわち、

ペテロ第一の手紙。この書簡は故郷であるエルサレムから遠く離れ、これらの地方に散らされ寄留している「選ばれた人々」すなわちユダヤ人たちに対して送られたものです。そしてこれを書いたペテロ自身も、エルサレムから遠く離れた地、バビロンからこの手紙を書いていることが後述の I ペテロ 5:13 から推察することができます。



### I ペテロ 5:13

「バビロンにいる、あなたがたとともに選ばれた婦人がよろしくと言っています。また私の子マルコもよろしくと言っています。」

このバビロンにいる「婦人」と訳されているのは新改訳だけで、新共同訳では「人々」、エマオ訳では「集まり」、口語訳、岩波訳、柳生訳などでは「教会」と訳されています。つまりペテロはバビロンに宣教に訪れ、教会を建てたようです。なぜならそこにも「散って寄留している、選ばれた民」、ユダヤ人がいたからです。バビロンにいたユダヤ人たちは B.C586 年、バビロニア帝国によって捕囚となった南ユダ王国の民の子孫たちだと考えられます。一方 1:1 に記されているポント、ガラテヤ、カパドキヤ、アジア、ビテニヤに散らされたユダヤ人たちは B.C722 年にアッシリア帝国によって捕囚となった北イスラエル王国の民の子孫たちだと考えられ、つまりペテロは、全てのイスラエルの子孫たちに気を配っていることが解ります。

### 1. 予知

1:2 父なる神の予知に従い、御霊の聖めによって、イエス・キリストに従うように、またその血の注ぎかけを受けるように選ばれた人々へ。どうか、恵みと平安が、あなたがたの上ますます豊かにされますように。

この文章はパラレリズム、対句法とも言い、同じ意味のメッセージを「言い換え」によって強調する表現方法が使われていると考えられます。すなわちペテロは散らされた彼らユダヤ人の教会を「父なる神の予知」、新共同訳では「あらかじめ立てられたご計画」、に従う人々と呼びました。そしてそれを「御霊の聖めによってイエシュアに従う」人々と言い換え、更に「イエシュアの血を受けるよう選ばれた」人々と言い換えています。この表現方法は、旧約聖書の随所に見られ、ユダヤ人の典型的な強調表現法です。旧約聖書に記された全ての預言や歴史事実や、福音書に記されたイエシュアの言動、行動は全て神のご計画のパラレリズムであり、神のご計画を様々な視点から比喩的に、たとえとして記されたものであると考えられます。ペテロはユダヤ人です。そしてこの書簡はユダヤ人たちに宛てて書かれたものです。ですからここに記されたメッセージを定説では原語とされているギリシャ語ではなくユダヤ的、すなわち彼らの言語である「ヘブル語」的観点を持って解釈することで、新たな側面から真理を導き出すことができると思われます。

先ほどこの手紙の宛先であるユダヤ人たちを指して「父なる神の予知に従う人々」とペテロが記したと述べましたが、この「予知」はヘブル語ではダウト(דָּאוֹת)と訳されています。このダウトが聖書で最初に使われる箇所が創世記 2:9 の出来事です。

#### 創世記 2:9

「神である主は、その土地から、見るからに好ましく食べるのに良いすべての木を生えさせた。園の中央には、いのちの木、それから善悪の知識の木を生えさせた。」

この「善悪の知識の木」で使われているのが聖書において最初のダウトです。つまり神の予知とは、善と悪を知ることなのです。何が善で何が悪かを判断、判別する、善と悪を区別する、分けること、何が善で神に受け入れられ、そして何が悪で神に受け入れられず滅びるのか、それが明確にされることが「神の予知」であり、新共同訳が記したように「あらかじめ立てられたご計画」と言えます。

## 2. ほめたたえる

1:3 私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちを新しく生まれさせて、生ける望みを持つようにしてくださいました。

私たちの主イエス・キリスト、すなわちイエシュアの「父なる神」がほめたたえられますように、というこの一文は聖書で最も重要な祈りであり、神様のご計画の第一であり唯一の目的であると信じます。この「ほめたたえる」という言葉は、私たちの賛美や祈りにおいて頻繁に使われる言葉ですが、この箇所においてはヘブル語ではバーラフ(בָּרַחַף)と訳されています。このバーラフが聖書で最初に使われている箇所を見てみましょう。

#### 創世記

1:20 神は仰せられた。「水には生き物が群がれ。鳥が地の上、天の大空を飛べ。」

1:21 神は、海の巨獣と、種類にしたがって、水に群がりうごめくすべての生き物と、種類にしたがって、翼のあるすべての鳥を創造された。神はそれを見て良しとされた。

1:22 神はそれらを祝福して仰せられた。「生めよ。ふえよ。海の水に満ちよ。また鳥は地にふえよ。」

1:23 夕があり、朝があった。第五日。

ここではバーラフは「祝福して」と訳されています。天地創造の第五日、神は海と陸を分けられ、そこにそれぞれ水の中に生きる生物と、また翼のある生き物を創造されました。そしてそれらの生き物を良しとされ、バーラフ、祝福されました。そして神はそれぞれの生き物に対し、繁殖して増えるようにとお命じになりました。しかしどれだけ増えても水の生き物が陸に上がることに、また鳥が水の中に生きることはお許しになりませんでした。このように、バーラフには分ける、区別するという概念が存在することが解ります。ですから「父なる神がほめたたえられますように」とは、神が分ける方、区別される方、裁く方であるということを示していると考えられます。またこの天地創造の御業の最後に、神はあるものをバーラフ、祝福されました。それは第七日、安息日です。

### 創世記 2:3

神は第七日目を祝福し、この日を聖であるとされた。それは、その日に、神がなさっていたすべての創造のわざを休まれたからである。

神はこの第七日をバーラフ、祝福し、他の第一日から第六日とから完全に区別して第七日は「聖である」とされました。「聖」とは神の別称とも言える神を表す最も重要な表現です。つまり「聖である」とされたものは神の所有、神に受け入れられるものであるという意味を持ちます。ですから神のものとそうでないものとを分けること、区別すること、それが「聖である」ことの持つ意味です。このようにバーラフ「父なる神がほめたたえられますように」とは、神が聖なるもの、すなわちご自分のものとそうでないものとははっきりと分ける方、区別する方、裁く方であることを指し示していると考えられます。そのような神のご性質の故になされるご計画が「私たちが新しく生まれさせ」というものです。これは何か気持ちを一新するとか、心身をリフレッシュする、元気にするという程度のものではありません。「イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって…生ける望みを持つようにしてくださいました。」とあるように、イエシュアが現実の存在として、人間の肉体をもって死に、そしてよみがえられた、つまり新しい肉体、永遠の朽ちることのない完全な肉体を与えられたように、私たちにもそれが与えられる、そのようになるというご計画です。この事実を信じ受け入れ、期待し待ち望むことができるように、神は今の私たちにも働きかけてくださっています。

### 3. 資産

1:4 また、朽ちることも汚れることも、消えて行くこともない資産を受け継ぐようにしてくださいました。これはあなたがたのために、天にたくわえられているのです。

1:5 あなたがたは、信仰により、神の御力によって守られており、終わりのときに現されるように用意されている救いをいただくのです。

ここにもユダヤ人特有のパラレリズム、言い換え表現が見られます。すなわち「朽ちることも汚れることも、消えて行くこともない資産を受け継ぐ」という表現が「信仰により、神の御力によって守られており、終わりのときに現されるように用意されている救いをいただく」に言い換えられており、もっとシンプルに言うならば「…資産を受け継ぐ」が「…救いをいただく」と言い換えられ、同じ内容のメッセージがより強調され、深みが増し加えられていると考えられます。つまり「救い」とは、神から与えられる永遠の「資産」であるということです。この「資産」を意味するヘブル語ナハラ（נְחֻלָּה）は本来「相続地、所有地」を意味し、永遠の肉体を与えられた私たちは、ウロウロとこの地をさまよい歩くのではなく、先ほどの水の生き物と翼のある生き物にも表されていたように、自分のいるべき場所、居場所、住むべき土地が神から与えられるということです。このように「救い」の持つ意味が、パラレリズム、言い換え表現されることで具体的に説明されていると考えられます。より具体的にはエゼキエル書 48 章にその相続地の配置についての記述があります。エゼキエル書 48 章を開いてみましょう。これはイスラエルの地におけるその部族ごとの相続地についてのものですが、非常に詳細に記されています。では異邦人である私たちが一体どこに置かれるのが気になるところですが、このペテロの手紙は、イエシュアを信じたユダヤ人たちに宛てて書かれた書簡であることを覚えなければなりません。散らされているユダヤ人たちがイエシュアによって集められ、イスラエルの地に住むようになることが神のご計画の完成であり、アブラハムと交わされた約束の成就なのです。アブラハムとその子孫の祝福なくしてそれに繋がる異邦人の祝福はあり得ないのです。



1:6 そういうわけで、あなたがたは大いに喜んでいます。いまは、しばらくの間、さまざまの試練の中で、悲しまなければならぬのですが、

1:7 あなたがたの信仰の試練は、火で精錬されつつなお朽ちて行く金よりも尊く、イエス・キリストの現れのとくに称賛と光栄と栄誉になることがわかります。

ここもパラレリズムで表現されています。1:6 の「悲しまなければならぬ」と「大いに喜んで」という言葉が 1:7 で「信仰の試練」と「称賛と光栄と栄誉」という言葉に言い換えられて強調されています。「信仰の試練」とはたしかに「悲しまなければならぬ」ことであると思います。しかし「イエス・キリストの現れのとくに」すなわちイエシュアの再臨される時、それは称賛と光栄と栄誉に変わります。だからそれを「大いに喜ぶ」こととなりますと励ましていると考えられます。そしてここにも「朽ちて行く金よりも尊く」とあるように、私たちが朽ちることのない永遠の存在となることが語られています。

#### 4. 救い

1:8 あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています。

1:9 これは、信仰の結果である、たましいの救いを得ているからです。

またしても言い換え表現、パラレリズムです。ここではイエシュアを「見たことはないけれど愛する」ことに関する説明及び強調がなされていると考えられます。それが「見てはいないけれども信じる」ことに言い換えられ、更にそれを「信仰」と言い換えています。そして「ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びに踊る」ことが「たましいの救いを得ている」に言い換えられて強調されています。つまりイエシュアを愛するとはイエシュアを信じることであり、それが私たちに与えられた信仰であるということです。その信仰によって私たちは救われることが強調されていると考えられます。つまりイエシュア以外に私たちに救いをもたらすものはないということです。

#### 使徒の働き

4:12 この方以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人に与えられていないからです。」

そもそもイエシュア(Ἰησοῦς)という名前自体が「救い」という意味なのです。これを「イエス様」とか「ジーザス」とかに訳してしまうとその意味が失われ、ただの名前になってしまうのです。私たちがイエシュアをヘブル語でイエシュアと呼ぶ理由がここに 있습니다。なぜならイエシュアは私たちの唯一の「救い」だからです。

ペテロはこの手紙を散らされているユダヤ人たちに宛てて書き送ったと述べましたが、このユダヤ人たちはかつてイエシュアを迫害し、十字架にかけて殺したユダヤ教の指導者たちのようではなく、またその当時そこにいた人々でもなく、見てはいないけれどもイエシュアを愛する、信じる信仰によってたましいに救いを得ている新しい世代のユダヤ人であり、その教会、メシアニック・ジューの集まりであることが解ります。

1:10 この救いについては、あなたがたに対する恵みについて預言した預言者たちも、熱心に尋ね、細かく調べました。

イエシュアというヘブル語の名前には「救い」という意味があると述べました。ですから「この救いについて…熱心に尋ね、細かく調べました」は、「イエシュアについて…調べた」と言い換えることができます。旧約の預言者たちは、ただ神が言われたことを伝え、従っただけでなく、自ら積極的に救いについて、すなわちイエシュアについて熱心に研究、探求する人たちであったということだと思われま

1:11 彼らは、自分たちのうちにおられるキリストの御霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光を前もってあかしされたとき、だれを、また、どのような時をさして言われたのかを調べたのです。

旧約の預言者たちがどのような仕組みで神に従うことができたか、預言することができたかが記されています。彼らには「キリストの御霊」が与えられていました。これはキリスト、ヘブル語ではメシアすなわちイエシュアについて語る霊、イエシュアについて証しする霊のことです。ヨハネの黙示録ではこれを「預言の霊」と呼んでいます。

#### ヨハネの黙示録

19:10 「…神を拝みなさい。イエスのあかしは預言の霊です。」

旧約聖書のほとんどが彼ら預言者たち、すなわちキリストの霊、預言の霊を与えられた人々の手によって書き記されました。しかし彼らはそれをただ書き記しただけでなく、その意味が何であり、何を指し示したものであるのかを自ら積極的に研究、探究し、調べたのです。

ちなみにこの 1:10 と 1:11 もパラレリズムになっています。どちらも「預言者が…調べた」という同じ内容です。つまり 1:10 の「あなたがたに対する恵み」が 1:11 で「キリストの苦難とそれに続く栄光」に言い換えられて説明されているのです。「恵み」という言葉だけでは様々な意味に捉えられてしましますが、それを筆者であるペテロはキリストすなわちメシアである「イエシュアの苦難とそれに続く栄光」と言い換えてその内実を説明しています。「イエシュアの苦難」とは十字架の死であり、「それに続く栄光」とは復活そして栄光の王として再びこの地上に来られること、再臨されることを意味しています。また「恵み」はヘブル語でヘセド(חסד)と言い、これが聖書で最初に使われるのが創世記 19:19 の出来事です。

#### 創世記

19:19 ご覧ください。このしもべはあなたの心にかない、あなたは私のいのちを救って大きな恵みを与えてくださいました。しかし、私は、山に逃げることはできません。わざわざ追いついて、たぶん私は死ぬでしょう。

19:20 ご覧ください。あそこの町は、のがれるのに近いのです。しかもあんなに小さいのです。どうか、あそこに逃げさせてください。あんなに小さいではありませんか。私のいのちを生かしてください。」

19:21 その人は彼に言った。「よろしい。わたしはこのことでも、あなたの願いを入れ、あなたの言うその町を滅ぼすまい。」

これは天からの硫黄の火によって滅ぼされたソドムとゴモラの町の出来事です。その町の住民であったアブラハムの甥のロトは、神の恵み、ヘセドによって滅びを免れます。このようにヘセドとは滅びと真逆の、対照的な意味であり、「救い」を指し示す言葉であることが解ります。イエシュアは「救い」という意味だと述べました。この「恵み」「救い」「イエシュア」もまたパラレリズム、言い換えによる強調表現であると考えられます。

1:12 彼らは、それらのことが、自分たちのためではなく、あなたがたのための奉仕であるとの啓示を受けました。そして今や、それらのことは、天から送られた聖霊によってあなたがたに福音を語った人々

を通して、あなたがたに告げ知らされたのです。それは御使いたちもはっきり見たいと願っていることなのです。

旧約の預言者たちは、キリストの御霊、預言の霊によって与えられ、書き記した御言葉が自分たちのためではなく、後の時代の者たちのためであることを啓示されました。それがこの聖書であり、またその御言葉に耳を傾ける人々のことです。旧約聖書の時代は、預言者がキリストの御霊によって救い、恵みすなわちイエシュアを証しました。しかし新約の時代にはこのペテロのようなイエシュアの弟子たち、すなわち「天から贈られた聖霊」を与えられた人々によって福音が宣べ伝えられました。これもまた一つの大きなパラレリズムです。なぜなら旧約の預言者たちも新約のイエシュアの弟子たちもともにキリストすなわちメシアであるイエシュアを証しているからです。ですから 1:11 の「キリストの御霊」もこの「天から送られた聖霊」も言い換えられたものであり、同じ存在であると言えます。

## 5. 聖とされる

1:13 ですから、あなたがたは、心を引き締め、身を慎み、イエス・キリストの現れるときあなたがたにもたらされる恵みを、ひたすら待ち望みなさい。

1:14 従順な子どもとなり、以前あなたがたが無知であったときのさまざまな欲望に従わず、

1:15 あなたがたを召してくださった聖なる方にならって、あなたがた自身も、あらゆる行いにおいて聖なるものとされなさい。

1:16 それは、「わたしが聖であるから、あなたがたも、聖でなければならない」と書いてあるからです。

ここはたくさんのパラレリズムの連続です。それをたたみかけるようにして一つの事柄を指し示しています。それはすなわち「聖なるものとされなさい」、聖なるものとされるということです。それは一体どうということなのか説明されているのです。つまり「聖なるもの」とは、「心を引き締め、身を慎み、イエス・キリストの現れるときあなたがたにもたらされる恵みを、ひたすら待ち望む」者のことであり、また「従順な子どもとなる」ことであり、「無知であったときのさまざまな欲望に従わない」者のことであり、そして「聖なる方（すなわちイエシュア）にならう者」であるということです。では私たちはこの「聖なるもの」となるために、これから大変な努力をしていかなければならないのでしょうか。口語訳や新共同訳では「聖なるものとなりなさい」と訳され、新改訳の「されなさい」よりもさらに自らの努力を強いられるような印象を受けます。果たしてそうなのでしょうか。私たちは自らの努力や頑張りで本当に「聖なるもの」になることができるのでしょうか。ヘブル語でこのことをカーダシュ(קָדַשׁ)「聖である、聖なるものとされる」と言います。このカーダシュが聖書で最初に使われた記事は先ほどのバーラフ「祝福する、ほめたたえる」という言葉でも取り上げた創世記 2:3 です。

### 創世記

2:3 神は第七日目を祝福し、この日を聖であるとされた。それは、その日に、神がなさっていたすべての創造のわざを休まれたからである。

神は第一日から第六日の間に天地創造の御業をなされ、第七日目をカーダシュ、「聖である」とされました。天地創造をされたのは誰でしょう。そして第七日目を聖であるとされたのは誰でしょう。それは神ご

自身ただお一人ではないでしょうか。つまり本来カーダシュとは、聖とされるとは、神がなされる御業であり、神にしかできないことなのです。かつて旧約聖書に記された歴史において、イスラエルの民が自らの努力でこのカーダシュ、聖なるものなることに取り組みました。祭司制度、生贄、幕屋や神殿での礼拝などがそうです。しかしそれは初めから不完全であり、また結局失敗に終わったことは聖書が記す通りです。人間は自分たちの力では、どんなに力や守りが与えられ、助けられたとしても「聖なるもの」になることはできないのです。カーダシュはただ神によってのみなされる、神の御業です。ここに人間の助力や介入は一切必要ありません。ですから私たちは自分たちが「聖なるもの」とされることを信じ、受け入れ、その御業が成し遂げられる日をひたすら待ち望むのです。

1:17 また、人をそれぞれのわざに従って公平にさばかれる方を父と呼んでいるのなら、あなたがたが地上にしばらくとどまっている間の時を、恐れかしこんで過ごさない。

また「聖なるものとされる」とは、神によってその他のもの、すなわち神に受け入れられない、聖ではないものと分けられる、区別される、すなわちさばかれることを意味します。そしてその神を「父」とすること、すなわち「神の子ども」とされることであることが、ここで補足的に説明されています。

そしてこの「あなたがたが地上にしばらくとどまっている間の時」とは、私たちは今のこの地上においては寄留の民、旅人であり、目的地は他にあり、ここでは私たちが求めるものも、神が与えようとしておられるものも、ここにはないことが示されています。ですから「時を、恐れかしこんで過ごす」とは、1:13の「…心を引き締め、身を慎み、イエス・キリストの現れのときあなたがたにもたらされる恵みを、ひたすら待ち望みなさい。」という御言葉と同義だと考えられます。つまりこれもパラレリズムだということです。

## 6. 贖う

1:18 ご承知のように、あなたがたが父祖伝来のむなしい生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはよらず、

1:19 傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によったのです。

1:20 キリストは、世の始まる前から知られていましたが、この終わりの時に、あなたがたのために、現れてくださいました。

ここにもパラレリズムが見られます。つまり「父祖伝来のむなしい生き方」とは、「銀や金のような朽ちる物に」頼る生き方です。このような生き方の行きつく先は死であり滅びです。そこから私たちは「贖い出され」ました。この「贖う」という意味のヘブル語はパーダー(קָדַם)と言います。最初の箇所を見てください。

### 出エジプト記

13:13 ただし、ろばの初子はみな、羊で贖わなければならない。もし贖わないなら、その首を折らなければならない。あなたの子どもたちのうち、男の初子はみな、贖わなければならない。

このように、本来パーダーは、何かの身代わりに殺されることを指し示しています。私たちの身代わりの小羊として、イエシュアは十字架においてその尊い血を流し、そして死んでくださいました。それがイエシュアが「あなたがたのために、現れて」くださった、人の肉体をとって来られた理由です。

1:21 あなたがたは、死者の中からこのキリストをよみがえらせて彼に栄光を与えられた神を、キリストによって信じる人々です。このようにして、あなたがたの信仰と希望は神にかかっているのです。

イエシュアはご自分の力で死者の中からよみがえられたのではありません。御父である神がよみがえらせたのです。神には人を死者の中からよみがえらせることができになること、そしてそれが神のご計画であることをイエシュアはその身をもって証ししてくださいました。ですから私たちの「信仰と希望は神にかかっているのです。」

## 7. 愛する

1:22 あなたがたは、真理に従うことによって、たましいを清め、偽りのない兄弟愛を抱くようになったのですから、互いに心から熱く愛し合いなさい。

この言葉は先ほどの 1:14~15 の箇所の言い換え表現、パラレリズムだと考えられます。もう一度見てみましょう

1:14 従順な子どもとなり、以前あなたがたが無知であったときのさまざまな欲望に従わず、

1:15 あなたがたを召してくださった聖なる方にならって、あなたがた自身も、あらゆる行いにおいて聖なるものとされなさい。

この 1:14 の「従順な子ども」とは 1:22 の「真理に従う」人のことであり、1:15 の「聖なる方にならう…あらゆる行い」が 1:22 では「偽りのない兄弟愛」と言い換えられていると考えられます。ですから 1:15 の「聖なるものとされる」とは 1:22 の「互いに心から熱く愛し合う」ことであると考えられます。「愛する」はヘブル語でアーハヴ(אהב)と言います。最初の箇所を見てみましょう。

### 創世記

22:2 神は仰せられた。「あなたの子、あなたの愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そしてわたしがあなたに示す一つの山の上で、全焼のいけにえとしてイサクをわたしにささげなさい。」

アーハヴは本来アブラハムがひとり子であるイサクを、つまり父がたったひとりの息子を愛することを意味しています。この箇所はアブラハムがイサクを全焼のいけにえとしてささげるといふ神が彼らにお与えになった試練を記したのですが、これが御父である神が、そのひとり子である御子イエシュアを十字架にかけて死なせることの型であり、この出来事もまたパラレリズムと言えます。ですからアーハヴ「愛する」とは「御父が御子を愛する」ことを指し示していると考えられます。神がイエシュアを愛する愛、神

の愛、それがアーハヴなのです。これは先ほどのカーダシュ「聖とされる」と同様、神にのみ可能な行為であり、人間の努力や頑張りによって成し得るものではないということが解ります。

## 8. 永遠

1:23 あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく、朽ちない種からであり、生ける、いつまでも変わることのない、神のことばによるのです。

そしてこの言葉は先ほどの 1:18~19 の箇所のパラレリズム、言い換え表現という形を取りながらも、新たなメッセージを提示していると考えられます。もう一度先ほどの 1:18~19 を見てみましょう。

1:18 …あなたがたが父祖伝来のむなしい生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはよらず、

1:19 傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によったのです。

1:18 の「あなたがたが父祖伝来のむなしい生き方から贖い出されたのは」がこの 1:23 では「あなたが新しく生まれたのは」という表現に言い換えられています。同様に 1:18 「銀や金のような朽ちる物にはよらず」が 1:23 では「朽ちる種からではなく」と言い換えられていることが解ります。そして 1:19 では「傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によったのです」というイエシュアの十字架の死を指し示す言葉が、1:23 では「朽ちない種からであり、生ける、いつまでも変わることのない、神のことばによるのです」とイエシュアが生ける神の御言葉であり、それが永遠に存在し、変わることのない御方であるという内容に言い換えられているのです。つまりイエシュアとは、私たちが「贖い出され」て「新しく生まれる」ために十字架でその血を流し、死なれただけでなく、神によってよみがえられたこと、そしてそのよみがえりとは、もはや二度と死ぬことのない、「いつまでも変わることのない」永遠の御方であるということが示されていると考えられます。

## 9. 福音

1:24 「人はみな草のようで、その栄えは、みな草の花のようだ。草はしおれ、花は散る。

これも典型的なパラレリズムです。「人はみな草のよう」が「その栄えは、みな草のよう」と言い換えられ、「草はしおれ」が「花は散る」に言い換えられています。

1:25 しかし、主のことばは、とこしえに変わることがない。」とあるからです。あなたがたに宣べ伝えられた福音のことばがこれです。

これはイザヤ書 40:6 からの引用です。これがなぜ良き知らせ「福音」であるのかというと、この箇所は

### イザヤ書

40:1 「慰めよ。慰めよ。わたしの民を」とあなたがたの神は仰せられる。

40:2 「エルサレムに優しく語りかけよ。これに呼びかけよ。その労苦は終わり、その咎は償われた。そのすべての罪に引き替え、二倍のものを主の手から受けたと。」

というイスラエルの民に対する慰めから始まり、

40:10 見よ。神である主は力をもって来られ、その御腕で統べ治める。見よ。その報いは主とともにあり、その報酬は主の前にある。

40:11 主は羊飼いのように、その群れを飼い、御腕に子羊を引き寄せ、ふところに抱き、乳を飲ませる羊を優しく導く。

という希望のメッセージで結ばれている箇所であるからです。イスラエルの民であるユダヤ人たちにとって、これこそが良き知らせであり「福音」なのです。そしてそれが朽ちて行く人間によってなされるのではなく、神によってよみがえられた御方、「朽ちない種」、「とこしえに変わることがない」神の御言葉である御方、キリストすなわちメシアであるイエシュアによってもたらされ、成し遂げられることが示されていると考えられます。

## 終わりに

このIペテロの手紙の1章は、それほど長い文章ではありませんが、非常に多くのパラレリズム、言い換えによる強調表現がなされていることが解ります。つまり筆者であるペテロは、正確には彼に靈感を与えて書き記させた神は、決して多くのことを語っておられるのではないということです。同じ対象について、様々な視点から何度も何度も繰り返し繰り返し、言い方を換え、たとえを用い、パラレリズム、言い換え表現によって説明し、強調し、それを証ししておられるのだと思われます。そしてその対象となるものを一言で表すならばやはり「神のご計画」、神には成し遂げたいことがある、ということではないでしょうか。神がそのご計画について、どれほどの情熱を燃やし、執着しておられるのかがこの聖書全体に施されたおびただしい数のパラレリズムの中に表されていると感じさせられます。そしてこの神のパラレリズムには、もう一つの意味があると考えられます。それは私たち人間が何度も何度も繰り返すことで学習する生き物であり、そのように神が人間を造られたがゆえの手段であるということです。ですから私たちは、神がそれほどまでに情熱を注いでおられるそのご計画について、それが記されている唯一の書物であるこの聖書から、何度も何度も繰り返し教えられることを、ますます熱心に求めていこうではありませんか。